

「ディレクトフォース」

まず始めに、近藤玄大さんのお話を伺った。近藤さんのお話の中心は、ものづくりに関する考え方だ。近藤さんは「もの」を無機質な人工物から温かみのあるものへとしたいと語っていた。その考えを象徴するものが近藤さんの開発する筋電義手なのだと思う。これまでの義手は障害を埋め合わせ、隠すものとして作られてきた。しかしこれからは個性として表現できるようにしなくてはならない。ウェアラブルアイテムで個性を表現するように、義手のカスタマイズ性によって障害をプラスに変える、この発想は逆転の発想というべきか、従来考えられてこなかったものである。ところがそのプラスへの転換は、議論を巻き起こすこともある。

世の中には私たちが思いもしないような姿で生活している人がいるらしい。イギリス国籍のニール・ハービソンさんだ。ハービソンさんは生まれつきの色覚異常を持ち、世界が白黒に見える。そこで彼は色覚を周波数に変え、振動に変換することで色を感じ取れるようにしたというのだ。そしてさらにはその能力を拡張し、不可視光、つまり赤外線や紫外線をも識別できるようにしたという。彼は障害を乗り越えるどころか、健常者の能力をも凌駕してしまったことになる。私は人類の能力が、本来であれば到達不可能な点に達することに倫理的な問題があると考えていた。ハービソンさんの例は、私がこの疑問を近藤さんにぶつけたときに教えてもらった事例である。人間を変えていくことは、地球の環境を変えてしまうより、はるかに合理的と考える人もいるというお話をされた。これは今までの私には無かった視点である。確かに、いま私たちは地球の環境を大きく破壊し、地球の生態系は乱されている。例えば温暖化によって気温は上昇し、さらにエアコンを使うことで気温上昇を招くという悪循環に陥っている。しかし、私たちの身体が気温上昇に対応できるように変化したらどうだろうか。エアコンの使用は減り、温暖化に歯止めをかける一助となるのではないか。ということらしい。もちろんこれは近藤さんご自身の考えではない。そういう風にとらえる人もいるということだ。近藤さんは私の疑問に対して明確な答えは示さなかった。近藤さんは、もし興味があるなら自分で調べてみるのが大切、と話された。

私はすべてが合理的ということでは割り切れないのではないかと感じた。このような自分の考えを持つためには自分から学び吸収していく姿勢が大切なのだとすることを近藤さんから学ぶことができた。

「国連広報センター訪問」

私たちの班はみんな国際関係の仕事を目指すとすることで、国連広報センターを訪問することになった。現在の国連の事務総長は潘基文からアントニオ・グテーレスにかわっており、第9代目である。日本には30を超える国連機関の支部があるが、このうち本部が日本

に所在するのは国連大学ただ 1 つだという。国連大学は教育機関としてではなく、研究機関として活動している。国連大学図書館には設立当初からの国連での決議文が全て保存されていた。国際機関にはUNで始まるものとWで始まるものがある。日本語に訳すと、国連～機関か、世界～機関の違いである。この 2 つは成立過程が異なる。国連～機関は国連の加盟国による機関なのに対し、世界～機関はもともと独立しており、独自の加盟国を持つのだという。

国連のなかでも広報センターの大きな仕事の 1 つとして翻訳がある。国連での決議文は国連公用語の、英語、フランス語、スペイン語、中国語、アラビア語、そしてロシア語で作成されるため、日本語の公式文書が存在しない。それでは日本の人々に伝えることができないため、翻訳する作業が必要になってくる。この翻訳は機械に頼るわけにはいかないため、たくさんの労力を必要とするらしい。

また、インタビューや記者会見の設定も広報センターの仕事だ。講演やセミナー、イベントの企画などもするという。私たちが考えていたより、裏方の仕事のほうがずっと多いことを知った。

国連に求められることは平等な立場から各国をみることだ。国連はレフェリーなのだという。もし特定の立場に偏ってしまったら各国からの支持は得られなくなってしまい、国連のまとまりが失われてしまうだろう。

私たちは国連広報センターに訪問する前に多くの下調べをしたうえで、不躰な質問をしてしまった。しかし、自分の聞きたかったことを聞くことができたという点で意義のあるものだったと思う。国連に行って学んだこともやはりコミュニケーションの大切さである。世界と関わる仕事をするならばなおさら、相手のことを理解していなければならない。コミュニケーション能力にはお互いを理解する能力も含まれているのだと思った。

#### 「東大研修」

東大研修は、普段接することのない東大生の方たちと直接お話できる貴重な機会だった。ほとんど丸 1 日東大生の方たちと関わるなかで、あまりにも遠い雲の上の存在だった東大生が、人間味を持った、現実の人間として少し身近に感じることができた。その中で今後繋がっていく重要な考え方を学んだ。

人生とは自分の可能性を狭めていくプロセスだという。年齢が若いうちの方が様々なことに挑戦できる。年齢が経つにつれて挑戦はしづらくなり、選べる選択肢は少なくなっていく。とても悲しいことのように疑いようのない事実だ。しかし、そこから重要で、選択肢を残すために必要なのが勉強なのだという。つまり勉強は自分の可能性を広げるためというよりかは、将来に向けて選択肢をより多く残そうとするものということだ。だから自分の将来の職業と直接結びつかない勉強もする必要があるのだと納得した。

自分の将来を考えていく上では、進路を絞っていくことも重要だ。いくら選択肢が残っていたとしても、選ぶことが出来なければ意味がない。進路を決めるためには目的地を決め

なければならない。つまりどんな職業に就きたいのかを考え、そのためにしなければならないことを考えるという順序だ。もちろん様々なことを学び、そのなかで進路を決めるというやり方もある。だがそれでは広く浅い学びになってしまうと思う。東大生の方々とお話すると、やはり学ぶ意識の高さを実感する。何のために学んでいるのかをはっきりさせているからこそ、レベルの高い学びができるのだという。

どの方にお話を聞いても共通して大事だと話されていたのが人とのかかわりだ。この先社会に出ていくにあたって、人とコミュニケーションをとる能力はなにより大切となる。コミュニケーション能力のなかでも大事になってくるのが自分の意見を表明する能力だ。

やはり実際に東大に行ってみると、レベルの高い意見表明が行われていると感じた。例えば大学構内の掲示板には大学運営への要求や政治的な主張など、なかなか言いにくいことであっても堂々と意見表明していた。また東大生の方々によるプレゼンテーションをいくつか見せてもらったが、どれも要点が簡潔にまとまっていて、伝わりやすい構成になっていた。ただ偏差値が高いというだけではなく、そういった実際の世界に応用できる力を持ってこそ東大生なのだと感じた。

一連の研修を通して学んだことは、人は人との関わりのなかでしか成長しないということである。自分の殻に閉じこもったまま生活していてもなにも変わらない。人と関わって行く中でコミュニケーション能力を身につけ、積極的に知識を吸収し、自分のなかで考えを深めていくことができる。今まで以上に人とのつながりを大切にし、すべての人を先生として日々学んでいきたいと思った。